Interior Column （4月号）99/3/18

「住」 － *住むことは澄むこと* －

「住まい」は建築の中で最も生活に密着したものです。そこは日常生活の現場とも言えます。現代の日本の暮らしには、いくつかの特徴的なことがあります。

まず、様々な行為が同じ空間で営まれることが当たり前です。次に、贈答品・記念品が習慣となって、意図しないのにモノが増える傾向があります。さらに、現代日本文化と同じく、伝統的な要素と外来の要素が共存または混在して生活が営まれます。二か国語を使うことをバイリンガルと言いますが、日本人の暮らしは言わばバイ・カルチュラル（二重文化）またはマルチ・カルチュラル(多重文化)ではないでしょうか。

このような事情から、住まいの中には実に多様な家具・什器があります。いや溢れていると言った方が良いかもしれません。モノの多さと多様さでインテリアが混乱し、収拾のつかない状態に陥ることになります。歳を重ね生活履歴が長くなればなおさらです。

このような状況に対し、インテリアデザインはどう役立つのでしょう。普通の住宅にあって、室内空間の美しい調和は可能なのでしょうか。インテリア雑誌に見るグラビア写真やモデルハウスのセッティングは、あまりにも現実ばなれしているように見えます。望ましい住まいのインテリアを実現するには、生活者（住まい手）とインテリアのプロとが一緒に考えるのが有効です。

生活者としては、自分らしい生活を大切にするとともに、見直すことも必要です。軽々しく物を持たない、家具を求める時は全体の調和を考え慎重に選ぶ、などが考えられます。

プロの側には、住まい手の生活のし易さ・楽しさを大切にしながら、柔軟な提案を期待します。例えば、いろいろな道具の出し入れが容易な収納装置の提供、住まい手が大切にしている家具を基調としたデザイン、隣り合う洋風の居間と和室に共通の素材や色調を用いること、などが思い付きます。一方、基調色の統一を強調しすぎることや、見た目の美しさを使い勝手に優先させることは避けたいものです。

住まいは、疲れを癒す安らぎの場所でもあります。商業インテリアと異なり刺激や驚きより、心の落ち着く雰囲気が求められます。使い易さとともに、静かに心を澄ませる空間を目指すのも、住まいのインテリアデザインで大切なことです。これには自然素材の感触や香り、音や光の扱いなど、造形デザイン以外の要素も関係します。住むことは「澄む」ことに通じているのです。

濱 惠介 はま けいすけ
大阪ガス（株） エネルギー・文化研究所研究主幹
専門：住環境設計
研究テーマ：エコロジカルな住まい・街づくり

この欄は、「住まいのインテリア考」として９月号まで６回連載する予定です。
執筆担当は大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所の隅野、栗本、濱及び山下の４名です。

（写真－１）
和洋折衷、モノが溢れている住宅室内

（写真－２）
モデルルームは現実とは別物、夢を売るインテリア